

日本組織培養学会

昭和55年8月8日発行

会員通信

第41号

発行責任者

小山秀機・許南浩(癌研)

松村外志張(東大・医科研)

丸野内棟(三菱化成・生命研)

伴貞幸(放射研・広島)

東京都豊島区上池袋1-37-1(〒170)

癌研究所・生化学部

電話 03-918-0111 内線2649

§ 第49回総会議事録

第49回総会は、第49回研究会(世話人:喜納勇会員)会期中1980年6月7日に行われた。旧幹事長、松村外志張会員から、新幹事長、丸野内棟会員の紹介があった後議事に入った。

総会に先立ち、物故会員、堀川正克教授(金沢大、薬学)に黙とうを捧げご冥福を祈った。

総会議事及び承認事項の概略は以下のとおりである。

1. 新入会員20名の承認(氏名、所属は別葉に記載)
2. 山田正篤事務局責任者より会計報告(別項)が行われ、承認された。また今年度は、通信費20%、印刷費20%及び業務委託費4%の値上が見込まれるので、会費を56年度より1,000円値上げすることが提案され、承認された。
3. 第50回研究会の世話人乾直道会員から、第50回研究会及び記念シンポジウム(詳細3頁参照)概要について説明が行われた。
4. 第51回研究会の世話人沖垣達会員に代って、山田会員より挨拶があった。第51回研究会は倉敷市アイビースクエアで、1981年5月に行われる予定である(詳細6頁参照)。
5. 第52回研究会世話人に、真泉平治会員を、第53回研究会世話人に、中沢恒幸会員を決定した。
6. 名簿改正について: 今年度は会員名簿改正が行われる(詳細12頁参照)。従来の名簿とは規格を変え、氏名のABC順に並べる形式になる予定である。掲載事項に変更のある会員は、同封葉書に記入して早急に会員名簿係の加納永一会員へ送付すること。
7. 会員通信について: 学会事務センターで、コンピューター処理上の誤りがあり、1978年6月及び1979年5月の新入会員28名に会員通信が送付されていなかった。学会事務センターから詫言状が届いた。なお、28名の会員には未発送の会員通信が送付された(詳細16頁参照)。
8. ビブリオグラフィー進行状況: 1980年度分の補助金申請は例年どおり行われ、5月末33万円の補助金決定通知があった。ただし、来年度分の補助金に関しては状況が非常に厳しくなりそうである。
9. 組織培養用語集編集委員会報告(黒田行昭委員長): 会員通信40号に一部報告済みであるが、今年7月末までに項目の選択調整を行う。刊行助成金を文部省に申請している。出版は学会出版センターに依頼した。1982年はじめに出版したい。
10. 株名登録委員会報告(佐藤二郎委員長): 株細胞に関するぼう大な情報のうち何を収集し、どうまとめるかについては、具体策を現在検討中である。大枠としては、専門の方々、例えば人がん細胞は関口、人線維芽細胞は奥村・三井、肝細胞は佐藤各氏等、グループにわけてやっていってはどうかと考えている。また理研のライフサイエンス推進部の方とも連絡をとりつつやっていきたい。

11. マイコプラズマ委員会の発足： 委員長に橋爪 社会員が決定した。委員会のメンバーは現在人選が進められている。「情報は逐一会員通信で知らせる。利用しやすい検査システムの確立を目指したい。」旨委員長より挨拶があった。（その後6月14日に第1回委員会を開催し、委員として木原光城氏(予研), 奥村秀夫, 黒木登志夫, 三井洋司各会員を選任した旨橋爪委員長より連絡があった。）
12. 研究教育システム委員会の発足： 委員長に梅田 誠会員が決定した。ワーキンググループの指針「当面細胞生物学の実習指導書を作製する」に沿って活動が開始される。委員会のメンバーは、実習指導書作製の具体的仕事をも兼ねることにし、その人選は、委員長に一任することが承認された。
13. 規約整備・草案委員会の発足： 規約整備に関するワーキンググループの検討事項を受けて、山根 績会員を委員長に、黒田, 黒木, 藤原, 内海, 小山, 松村, 丸野内各会員をメンバーとする委員会が発足した。検討事項の主要点は、①幹事の被選挙権40才未満という制限を取り除くかどうか、②文部省等学会の対外活動上不可欠な学会の代表（現在は事務局責任者として山田正篤会員に委託）の選出をどうするか、③規約と細則の検討などである。委員会の意向としては、たたき台を会員通信に載せ、会員諸氏の意見を集め、できれば次回総会で改正案を発表する（詳細7頁参照）。
14. ビブリオグラフィーに関するワーキンググループの報告（渡辺正己会員）： 5年前にアンケート調査をしたときの結果は、会員の大部分がビブリオグラフィーの存続を希望していた。その後、一部会員の献身的努力によって続刊されてきた。しかし当ワーキンググループで会員の意見徴集をし、検討を重ねた結果では、現行のままでは労力、財政の負担の大きさに比し、学問的に十分意味あるものとはなっていない。加えて、この1,2年財政的負担が非常に大きくなり、また文部省の補助金を得ることも困難になってきた。従って、学会としての定期刊行物のあり方に対する様々な案を会員通信に出して会員の卒直な意見を聞きたいと考えている（詳細10頁参照）。

（文責 宮沢宇彦, 丸野内棟）

別項：日本組織培養学会昭和54年度会計報告

前年度よりの繰越金	1,412,743 円 a)	54 年度支出	2,976,276 円 b)
54 年度収入	2,018,400 円 b)	次年度への繰越金	454,867
計	3,431,143	計	3,431,143

昭和54年度収入		昭和54年度支出	
正会員費	897,000 円	会誌発行費	1,586,120 円
賛助会員費	745,000	(ビブリオグラフィー77, 78)	
入会金	38,000	(会員通信 37, 38, 39, 40)	
文部省刊行補助金	330,000	会誌発送費	279,520
雑収入	8,400	通信費	71,410
		印刷費	75,290
		業務委託費	553,053 円 c)
		研究会補助金	200,000
		雑費	32,440
		特別会計繰入れ	178,443 円 d)
計	2,018,400 円	計	2,976,276

- a) ビブリオグラフィー '77 未払い分 607,750 円を含む。
- b) 54 年度の(実収入 - 実支出)は 976,276 円の赤字となっているが、ビブリオグラフィーを 2 年分 ('77 および '78) 支払ったこと、および今年から会計事務を完全に学会事務センターへ移管したが、山田の手元に残った 178,443 円を特別会計に繰入れたことで出た赤字です。
- c) 業務委託費は本年度やや多いが、内 8 万円は 53 年度精算分、および会計事務費として今年から 5 万円加わっている。
- d) 特別会計は 47 回研究会世話人(藤原美定会員)および 48 回研究会世話人(石館 基会員)から、それぞれ 112,000 円および 200,000 円の寄付があり、また合同精酒株式会社よりディスカバーゼ売金の一部 149,900 円の寄付があり、現在手元に 673,149 円ある。外国人の招へい、あるいは特別の行事などに使用します。

なお昭和 54 年度は何とかやりくりして、例年どうりの学会活動を行うことができましたが、昭和 55 年度には業務委託費(会員業務のみ)4%、通信費 20%、印刷費 20%の値上が見込まれており、それぞれ 2 万円、7 万円、20 万円で、合計して約 30 万円の赤字になることが予想されます。昭和 55 年度会費はすでに多くの会員が支払済みですので繰越金あるいは特別会計からこの赤字を充当します。昭和 56 年度より年会費を従来の 2,000 円より 3,000 円に変更することが総会で承認されました。なお、賛助会員費 1 口 10,000 円は据え置きと致します。(事務局責任者 山田正篤)

§ 第 50 回日本組織培養学会研究会のご案内

第 50 回研究会を下記により開催することになりましたのでご案内致します。

1. 会 場：全共連ビル・4 階大会議室
〒102 東京都千代田区平河町 2 - 7 TEL (03) 265 - 3111
2. 会 期：I) 第 50 回研究会
昭和 55 年 12 月 2 日(火)^{※1} 一般講演
昭和 55 年 12 月 3 日(水) 記念講演，総会，一般講演，懇親会
II) 記念シンポジウム
昭和 55 年 12 月 4 日(木)，5 日(金)
本シンポジウムのプログラムは末尾に記載してあります。
※1 現時点では 12 月 2 日 PM . 1 : 00 より開催予定ですが演題数により午前中より行います。
3. 記念講演会：“日本組織培養学会 25 年の歩みと将来”
4. 参加および：昭和 55 年 9 月 10 日(水)までに参加希望者は、別葉の参加申込み票(A)に、講演希望者講演申込みは、さらに講演申込み票(B)にご記入の上ご返送下さい。
特に本研究会は国際シンポジウムを併催致しますので、会場設営の都合上、大会参加のみの方も A 票は必ずお送り下さい。A 票のご送付ない参加者につきましては大会参加費を会員外参加費で頂くことがありますのでご留意下さい。
5. 抄録原稿締切：昭和 55 年 10 月 10 日(金)

6. 講演時間：一般講演は講演 20 分，質疑応答 10 分

記念講演は講演 35 分，質問・コメント 10 分を予定しております。

なおポスターセッションも予定しております。

7. 研究会参加費：（国際シンポジウム出席を含む）

会 員 4,000 円※

非会員 5,000 円

※国際シンポジウム Abstracts (1,000 円) は別に購入して頂く予定です。

8. 懇親会参加費：3,000 円

9. 参加申込先：〒257 神奈川県秦野市名古木 23

専売公社生物実験センター

乾 直道，西 義介，岩田邦男

(0463) 81-1277 内線 31, 32

10. 交通：地下鉄 丸の内線赤坂見附駅より徒歩 10 分

〃 有楽町線半蔵門線永田町駅より徒歩 7 分

国電四谷駅よりタクシー 5 分，東京，新橋駅よりタクシー 10 分

11. 展示：同会期中会議室，特別室で機械器具，試薬および書籍展示を行います。

12. 宿泊：一切ご用意致しません。各自でお願い致します。

付記 a) 多数の講演演題の出題を希望しております。

b) 本研究会は会員外の諸先生に広く参加していただきたく Open に致します。関連研究分野の方々の出席，討議へのご参加をお願い致します。

記念シンポジウムのプログラム

The Use of Mammalian Cells for Detection of Environmental Carcinogens: Mechanisms and Application

December 4

- 9.00 Opening Remarks: Dr. N. Inui
Morning Session I
Chairman: Drs. M. Radman and Y. Kuroda
- 9.10 Pro-cancer class of genes and the generation of chromosome mutation.
Dr. M. S. Sasaki
- 9.40 The nature of lesions leading to the formation of sister chromatid exchange.
Dr. A. V. Carrano
- 10.20 Chromosome aberration test in vitro as a screening tool for environmental mutagens/
carcinogens.
Dr. M. Ishidate Jr.
- 10.50 [Coffee Break]
- Morning Session II
Chairman: Drs. M. Radman and Y. Kuroda
- 11.10 The use of sister chromatid exchanges as a test for mutagenic carcinogens.
Dr. S. Wolff

11.50 Cytogenetic testing systems for detection of environmental mutagens and carcinogens. Dr. Y. Kikuchi

12.20 [Lunch]

Afternoon Session I

Chairman: Drs. E. Huberman and T. Okigaki

13.30 Some aspects of in vitro carcinogenesis using Syrian hamster cells. Dr. M. Umeda

14.00 The role of somatic cell in a multistage model of carcinogenesis. Dr. J. C. Barrett

14.40 Effects of phorbol-esters on fetal rat epidermal cells in culture. Dr. K. Indo

15.10 [Coffee Break]

Afternoon Session II

Chairman: Drs. E. Huberman and T. Okigaki

15.30 Initiation and promotion, mutagenesis and transformation of C3H 10T1/2 mouse embryo fibroblast. Dr. C. Heidelberger

16.10 Neoplastic transformation of human diploid fibroblasts treated with ⁶⁰Co-gamma rays and chemical carcinogens. Dr. M. Namba

16.40 Mammalian cell mutagenesis and carcinogenesis in vitro by chemical agents. Dr. T. Kakunaga

December 5

Morning Session I

Chairman: Drs. J. E. Trosko and M. S. Sasaki

9.00 Genetic aspects of DNA repair deficiency. Dr. H. Takebe

9.30 Excision repair of DNA damage produced by 4NQO in cultured mammalian cells. Dr. M. Ikenaga

10.00 Excision and cross-link repair of DNA and sister chromatid exchange in cultured human cells with different repair capacities. Dr. Y. Fujiwara

10.30 [Coffee Break]

Morning Session II

Chairman: Drs. J. E. Trosko and M. S. Sasaki

10.50 The detection of genotoxic chemicals in hepatocyte primary culture/DNA repair test. Dr. G. Williams

11.30 The effects of multiple exposure to alkylating agents on DNA repair. Dr. R. Montesano

12.10 To be announced Dr. M. Radman

12.50 [Lunch]

Afternoon Session I

Chairman: Drs. C. Heidelberger and Dr. M. Yamada

14.00 The use of mammalian cell mutants to study the mechanisms of mutagenesis. Dr. J. E. Trosko

14.40 The induction of mutation and cell differentiation by chemicals which initiate or promote tumor formation. Dr. E. Huberman

15.20 Metabolic activation of chemical carcinogens in cultured cells. Dr. T. Kuroki

15.50 Host-mediated mutagenesis for detection of mutagens/carcinogens. Dr. N. Inui

16.20 [Coffee Break]

Discussions on relevance of mammalian cell systems for detection of environmental carcinogens

Chairman: Drs. R. Montesano and T. Kuroki

16.40 DNA repair Dr. G. Williams

16.50	Chromosome	Dr. S. Wolff
17.00	Mutation	Dr. J. E. Trosko
17.10	Transformation	Dr. C. Heidelberger
17.20	Testing program of environmental carcinogens in Japan	Dr. T. Kawachi
17.40	General Discussions	
	Chairman: Drs. R. Montesano and T. Kuroki	
18.10	Closing Remarks: Dr. T. Kuroki	

§ 第51回研究会開催について

世話人：沖垣 達 重井医学研究所・細胞生物部門 〒701-02 岡山市山田 2117

Tel. (0862) 82-3113

会 期：昭和56年5月21日（木）、22日（金）

会 場：倉敷市美観地区 アイビースクエア

今の所予定ですが、20分/10分の一般講演の他に、海外からの講師による特別講演とラウンド・テーブル討論を計画しています。特にラウンド・テーブルはトピック毎に小グループにわかれて、当面の問題点、技術上の諸点等に関して先輩、新人のへだたりなく活発な討論を進めて頂くもので、米国TCAが長年に涉って継続し成功を納めているものです。研究会開催全般についてのご意見やご助言をおまちしています。

会場のアイビースクエアは白壁の里や大原美術館に近く、赤レンガと蔦のヨーロッパムードの建物群で、宿泊や食事の設備も完備しています。また、倉敷は瀬戸内や吉備路への小旅行の中心地です。

明年の初夏には細胞諸君に数日の留守をたのんでご家族や研究グループの週末旅行を兼ねての研究参加を計画されるのも一案かと思えます。

多数の会員、同好の方々のご出席を期待致しております。（文責 沖垣 達）

§ 第49回研究会を終えて

浜松医大 喜納 勇

昭和55年春の研究会は、去る6月6日（金）、7日（土）の2日間、浜松グランドホテルで開催されました。本学会は研究発表とそれに対する討論があくまで中心である、という創設以来の伝統があります。この目的にかなない、しかも質素で便利な会場を選ぼうといろいろ努力しました。しかし大学には講義室しかなく、また駅から、はなはだ遠いという悪条件のためあきらめ、結局ホテルにせざるを得ませんでした。結果的にはホテル側もなれており運営しやすく、アルバイトの人達も最少限で済み、私共のような小教室で開催するにはホテルは非常に適した場所であることがわかりました。

今回の研究会は、第50回研究会の前座ということもあって、なるべく従来通りの方法を踏襲する予定でしたが、会員の方々の創意に満ちた助言のお蔭をもちまして、1, 2の新しい試みを行うことができました。

第1は、一般演題にポスターセッションをもうけたことです。演題申し込みの増加とともに、演説時間を短かくせざるをえなくなり、これを防ぐにはポスターセッションをつくるより他に道がないと考えて行ってみました。ただ、討論は口演会場で行いましたが、もう少し時間の余裕をつくり、一定の時間を設けてポスターセッションその場での討論があった方がよいように思われました。

第2はマイコプラズマポスターセッションとその総合討論を行ったことです。これには座長の橋爪先生やその他多くの先生方のご努力の結果、第一回としてはかなりつっこんだ討論ができました。このセッションに参加された先生方に、この紙面を借りてあらためて感謝いたします。

シンポジウムは「ひと培養細胞の生物医学」と題して8人の方々をお願いいたしました。ひと細胞を使っただけの研究は将来もっと盛んになるでありましょうし、またそうあらねばならないと考えましたので、このテーマを選んでみました。幸い各演者の熱のこもった発表に、各方面からのひと培養細胞を利用しての研究方法が提示され、啓発されること大なる点が多かったと思っております。

一般演題では、外国からの参加者も含めて14題（一般示説3題も含む）の発表が行われました。例年通り多岐にわたった研究成果でありました。

最後になりますが、全国各地から160名（正会員63名、非会員92名、その他5名）もの多数の皆様にご参加いただきまして誠に有難うございました。ご協力いただきました演者の方々、座長の先生方、活発な討論をしていただいた方々、ならびに全会員の方々に深く御礼申し上げます。

§ 日本組織培養学会会則案および細則案

規約整備委員会委員長 山根 績

規約整備に関するワーキンググループ（WG）の活動を受けて、第49回総会（浜松）で規約整備委員会が発足しました。WGの素案をもとに委員をはじめ幹事、会員有志の方々の意見により会則案を作成しました。整備の要点は、新しく会長職をもうけ正会員による直接選挙により選出すること。幹事の40才停年制を存続させ、これを細則に規定したこと。このように会則と細則との二本立てにしたこと等です。特に会長職の新設と幹事の40才停年制の存続とについてはその背景について若干述べておきます。

会長（年齢制限なし）の新設についてはいくつかの理由があります。これまで山田正篤会員に事務取扱責任者をお願いして、主に対外活動を依頼し、文部省に登録されています。しかし、この職は規約にもなく、幹事会との関係も不明確なため御苦勞も多く、活動にも支障をきたすことがありました。そこで今回会長職を新設し、幹事会との関係も規定して本学会の責任体制を整備しようというものです。これにより若い幹事では負いきれない対外活動が、円滑に進むものと期待されるわけです。

次に、幹事の40才停年制に関して、その廃止の主な論点は、現在40才以上の多くの会員に実務上手助けをしていただいております。また精神的若さでは40才で線を引く必要がない。また、会員の構成では40才未満の会員が、40才以上の1/2以下であり、いきおい一部の若い会員に幹事職その他の負担が集中するということでした。しかし、もし一部の会員に負担が集中しすぎるのであれば、それをさける方法（たとえば、免疫期間を長くする）を考えればよい。しかも学会で現在問題となっている規約の整備、定期刊行物の問題、その他について会員の多くの了解が得られるならば、幹事の負担は少なくなるだろうと考えられる。

さらに、存続を主張する積極的な意見の骨子は、若い人が運営するというこの学会の良い特徴を残すべきであり、これをやめるといつかは長老政治になってしまう。実際に40才以上の会員で実務を手伝っている方々も、若い時に会の運営に参画した経験を生かしているものであり、それにより、他の学会にはみられない良い意味での家族的ふんいきを保持できているのである。

以上のような意見を十分考慮して、幹事の40才停年制を存続させることにしました。以下新しい会則案を提示します。

日本組織培養学会会則（案）

第1章 名 称

第1条 本会は、日本組織培養学会（The Japanese Tissue Culture Association）と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、組織培養法およびその応用の進歩発達に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、本会の目的を達成するためにつきのような事業を行なう。

1. 年1回総会を開く。その他必要に応じて臨時総会を開くことができる。
2. 原則として年2回研究会を開催し、学術上の研究成果の発表および知見の交換を行なう。
3. 必要と認められた定期刊行物を発行し、会員に配布する。
4. 国内および諸外国の関係学術団体および国際団体との連絡ならびに協力をはかる。
5. その他、本会の目的達成のために、必要と認めた事業を行なう。

第3章 会 員

第4条 本会の会員は、正会員、名誉会員、賛助会員とする。

1. 正会員は、組織培養およびその関連領域の研究に従事する個人で、本会の目的に賛同し、定められた会費を納めるものとする。
2. 本会の育成、組織培養の進歩に著しい功績のあった正会員を名誉会員として推薦し、会費を免除する。推薦は、幹事会が行なう。
3. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、定められた賛助会費1口以上を納める個人または団体とする。

第5条 特別の理由なく、引続き2年以上会費を納入しない正会員は、除名することができる。

第4章 役 員

第6条 本会は次の役員をおく。

会長1名、幹事8名、会計監査2名

第7条 会長および幹事は、細則の定めるところにより、正会員の中から正会員の投票により選出される。会長の任期は4年とする。幹事の任期は2年とし、毎年その半数が改選される。

第8条 幹事会は会長および幹事によって構成され、会務を運営する。

第9条 会長は、幹事と共に幹事会を構成する。会長は、本会を代表し、会務を統轄する。特に対外活動に関して責任を負う。

第10条 会長はその職務の補佐のため、正会員の中から庶務掛、会計掛各1名を指名することができる。任期は2年とし、重任は妨げない。

第11条 会計監査は、会長が幹事をのぞく正会員の中より委嘱する。任期は1年とし、重任は妨げない。

第12条 幹事会は、研究会の開催地および世話役を決定し、委嘱する。

第13条 幹事会は、本会に必要と認める専門委員会をおくことができる。

第5章 会 計

- 第14条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。
- 第15条 研究会に要する経費は、別にこれを徴集することができる。
- 第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日より始まり、翌年3月31日をもって終わる。

第6章 会 議

- 第17条 総会、幹事会は会長が招集する。これらの会議の議事は、出席者の過半数の賛成を得て決定し、可否同数の時は、議長がこれを決定する。

第7章 会則変更

- 第18条 本会会則の制定変更は、総会の議決を経る必要がある。

附 則

1. 本会の入会金は1,000円、会費は年額、正会員3,000円、賛助会員1口10,000円とする。
(昭和55年6月7日第49回総会で決定)
2. 本会則は昭和 年 月 日から施行する。

日本組織培養学会細則（案）

第1章 会 員

- 第1条 本会に正会員として入会を希望する者は、日本学会事務センターより所定の用紙（入会申込書、および会員名簿整理表）を入手し、記入の上日本学会事務センターへ送付する。申込みには、本会会員2名の推薦を必要とする。
- 第2条 入会の承認は、幹事会で行なわれる。

第2章 総 会

- 第3条 総会では、本会の事業計画、収支決算が審議される。また、本会の役員人事に関する報告行なわれる。

第3章 役員を選出

- 第4条 役員を選出はつぎのとおり行なう。
1. 会長は、幹事のなかから2名の選挙管理委員を委託する。
選挙管理委員は、選挙事務を行なう。
 2. 会長および幹事の投票は、正会員が無記名、郵送によって行なう。
 3. 会長の重任は禁止する。幹事会は、会長候補を推薦することができる。
 4. 幹事の被選挙権は満40才未満とする。投票数の上位より4名を選任する。
 5. 幹事は任期後の2年間、被選挙権を有しないものとする。

第4章 幹 事 会

- 第5条 幹事会は年2回開催する。但し、会長が必要と認めた時、または幹事の3分の2以上が開催を要求した時は、臨時幹事会を開催することができる。

第5章 事 務 局

- 第6条 本会の事務局は、日本学会事務センター（〒113 東京都文京区弥生2-4-16）内とする。
- 第7条 入会金および会費の送付先は日本学会事務センターとする。

第6章 細則の変更

第8条 細則の変更は、幹事会の議決による。

第9条 本細則は、昭和 年 月 日より実施される。

以上に記した案は、当委員会で大方向の了解が得られておりますが、完全な一致に至っているわけではありません。しかし当委員会としてはこの会員通信により会員諸氏の整備案に対する意見を集め、それをもとに再度案を組みなおし、第50回総会で議決したいと考えております。会員諸氏からの意見を盛り込んだ案は第50回研究会の第1日目に受付で配布するように努力し、それをもとに総会で討論して頂きたいと考えております。

重要なことですので多くの方々がこの整備案に対する意見をまえて当委員会（委員長 山根 績）へ寄せられることを期待しております。

§ ビブリオグラフィー・ワーキンググループの活動報告（2）

1979年春の当学会幹事会決定に基づき、現幹事3人よりなるビブリオグラフィー・ワーキンググループを設け、この一年間ビブリオグラフィーの改良策について審議してきた。第1回の審議経過報告および当ワーキンググループの基本姿勢については、会員通信38号に述べたとおりである。その後、会員各位および従来ビブリオグラフィーの発行に携わってこられた世話人から寄せられた貴重なご意見をもとに審議を続け、一応の基本案を得た。ここではその改訂案を具体的に示すとともに、実施に際して生じると思われる問題点についても列挙する。

1. 編集方針について：

従来のビブリオグラフィー形式を次のように抜本的に改訂する。内容は、従来の研究会のAbstractに加えて、Review, Reports および Technical notes を設ける。Review とは、その年の一年間の日本の組織培養研究の動向をまとめ概説したもので、あらかじめ幹事会で推せんされた会員が執筆を担当する。Reports とは、春と秋の研究会のシンポジウムの演者がその内容を英文レポートとして提出するもの。Technical notes とは、興味ある細胞株（分離された突然変異細胞を含む）や新しい実験技術の紹介で、各人が自由に投稿できるものとする。経費および労力を最少限度に止めるため、担当者自身がA4判タイプ用紙に1.5 space でタイプし、オフセット印刷（B5判に縮小）する方法を採用する。

2. 問題点について

この改訂案を進めるにあたっての問題点としては、現在の学会の規模からしてある限られた数人の会員の手だけでこういったものを継続発行することは困難であること、従来のもの以上に経費と労力が必要となること、研究会の開催方法（プログラムの設定の仕方、演題申し込み、選択の方法など）や会費値上など、学会運営の基本方針に関ることについても検討の余地があること、さらに具体的には、シンポジウムの内容を英文 Reports として発表した場合 Originality に関してトラブルが生じたり、Technical notes に投稿したことが将来他の雑誌に Full paper として投稿する際の妨げになることなどが考えられる。

以上が当ワーキンググループの改訂案（案案）です。現在、これをたたき台としてさらに有用で意味のあるものに改良すべく審議継続中である。いずれにせよ、こういった出版物の発行は、学会活動

には欠かせないものであり、将来的には当学会の欧文誌的なものにまで発展させるべき筋のものであるというのが当ワーキンググループの結論である。会員各位の忌憚のないご意見、ご批判を仰ぎたい。

附 欧文刊行物を出版する場合の現時点における費用の見積りを参考までに示しておく。

欧文刊行物見積り

内容	刊行頻度 (年間)	部数 (1回)	ページ数 (1回)	編集人力 (年間)	費用(年間 万円)				文部省の援助	会員1人あたりの負担 見積り)
					タイプ費	印刷製本2)	発送	編集その他		
現行	1	850	120	4人×日	18×1	62×1	17×1	α	直接出版費の33%	1,500円
例A	4	1,000	80	16人×日	12×4	48×4	20×4	α	"	6,000円
例B	4	1,000	40	8人×日	6×4	30×4	14×4	α	"	4,000円
例C	2	1,000	80	8人×日	6×4	48×2	20×2	α	"	3,000円

- 1) 文部省の援助を得た場合、文部省の援助を得ず広告収入で一部をまかなうことも考えらえる。
- 2) 紙質を現行と同じとして見積っている。(文責 乾 直道)

§ ビブリオグラフィー・ワーキンググループの活動報告(3)

ビブリオグラフィー・ワーキンググループが先に答申した活動報告(本会員通信)に対する幹事会における審議および総会でのご意見を伺っていると、ワーキンググループの活動の裏付けとなっているビブリオグラフィー存続に関するアンケート結果(会員通信Vol. 15(1971), Vol. 25(1975), 会員の70%以上が存続を希望するという結果となっている)が、この数年の間に有名無実なものに変わっているという感を強くした。そして、具体的な意見として寄せられるものはほとんどが廃止することに賛成する意見に限られ、その内容は、先の会員通信(Vol. 40)の黒木氏の意見に集大成される。

現在、本学会の活動費の相当な部分を占めているビブリオグラフィー出版業務を、今後どうするかは極めて早急に決定せねばならない。

振りかえてみるに、ビブリオグラフィーに関する議論が始まってもう10年以上を経ている。その間の議論はいつも堂々巡りを繰り返している。ここらでこの堂々巡りをストップせねばならないと考える。

そこで、ワーキンググループとしては、本会員通信で示した改訂案をたたき台として、会員諸氏が積極的な意見をお寄せ下さることを希望したい。そして、この問題の早期決着を計るため、次のスケジュールで以後の活動を行ないたいと考えている。会員諸氏のご協力をお願いしたい。

(文責 渡辺克己)

スケジュール案

S 55年 11月末	意見収集
S 55年 12月	幹事会審議
S 55年 12月	第50回研究会時の総会において報告及び審議
S 55年 12月末	第42号会員通信で具体案の呈示
S 56年 3月	第43号会員通信で存続の賛否及び存続する場合の最終案の呈示
S 56年 5月	第51回大会総会において決定(出席できない会員の為に第43号会員通信で郵便による投票を呼びかける。)

§ 会員名簿作成のご案内

今夏、会員名簿を作成し、秋には配布致したいと願っています。夏とか秋とか言うあいまいな表現をお許し下さい。ついては、会員諸氏には全員同封のハガキにご記入の上、切手をはって「会員名簿作成係」に至急ご返送下さい。今回の名簿では、幹事会の意向をくみ入れて、①氏名記載順序を機関別から氏名のアルファベット順に変え、②専門分野の記載欄を省き、③東西の地域別を省く事にしたと思っています。以上よろしくお願い申し上げます。
(文責 加納永一)

§ 堀川正克君よ、さようなら

独協医大 勝田 甫

君は松山に生まれ、兄弟がみんな町を出て行くので、お母さんのそばに居てあげたいと考え、松山の愛媛大に入った。しかし好学の君はそれだけであきたらず、阪大吉川教室の大学院に入った。いかに秀れていたかが伺われる。大学院のとき三島の遺伝研に留学した。この頃が私とのふれ合いの初めである。

黒田先輩に連れられて、組織培養学会にでてきて、“あんなおそろしい学会は初めてだ”と言ったそうである。

その後東京で医学会総会が開かれ、組織培養に関するシンポジウムの編成を私が頼まれた。そこで演者の一人に君を加えたが、大学院学生で医学会総会のシンポジウムでしゃべったのは君が初めてではなかろうか。

千葉の放医研に入った後も、医科研でやっている抄読会にたえず遠路を出席された。

私のがん特別研究班には早くから班員に加わり、活発な討論で他班員に裨益された。いまでも培養学会などで話すと、君がずっと立って附議するような気がしてならない。

ボスの菅原氏に随って京大に移り、それこそ兎小屋のようなところでこつこつと活発な研究を続けられた。研究者のお手本のような仕事振りだった。

その後、金沢大学の薬学部の大場君が堀川君は教授にどうだろうと相談してきた。私はもちろん大賛成した。こんな男は滅多に得られないから、早く引抜けと言った。金大の教授に決まったとき、君は大場君と一緒に大学の屋上でビアパーティをやったそうだね。その情況が思いやられるよ。

私は戦時中駆逐艦の甲板から夜空をながめて、おれはこんな星の一つにもなれないのかと悲しんだ。君は立派に星になるだけの仕事をした。そしていつまでも我々の心に残る。

君はいま どの星になられしやと

天の河 仰ぎて涙する我

§ Bibliography 廃刊提案に賛成する

明治薬大・衛生化学 安藤俊夫

会員通信第40号(昭和55年3月5日発行)誌上に、黒木登志夫氏よりビブリオグラフィ―廃刊の提案がなされた。勇気ある発言と快哉をもって読ませていただいた。かねがね同様に考えていた者として、私もここに賛意を表し、黒木氏の援護射撃をしたい。

氏のあげるいくつかの論点には全て賛成なので、あえて繰り返す事は避け、多少の補足をしつつ私

の考えを述べてみたい。

第1に、氏が言われるように、細胞機能の解析に当って、組織培養を応用する事は、今や、ごく当り前の事であり、そのユニークさは現時点では、すでに失われている。すなわち life science の全ゆる分野に於て応用されている。したがって極論すれば、「組織培養を応用した研究」という事で編集すれば、全ゆる分野の全ゆる研究が網羅される事になってしまう。しかも日本人研究者のもののみと制限付きである。これでは日本人研究者がどのような分野でどのような研究を行っているかを知る年鑑であり、研究者相互の理解、親睦を深める事には役立つとしても——この目的のためには別な形が、いくらでもありうる——アブストラクト誌の目的である自分の研究の周辺の情報を広く、しかも速やかにキャッチするという意味は全くない。現在のように、全ゆる分野の研究の速やかな進展を考えるならば、「日本人の……」という事に拘泥している事は、もはや全く意味を持たない。したがって、わがビブリオグラフィーも、日本人研究者の一つのささやかなモニュメント以上のものにはなりえない。この点は、関係諸氏のご尽力によって、現在よりも速やかな発行が実現されたとしても、いささかも変わらない。つまり、「広く、速やく」の前者に欠けるわけである。このような次第で、私自身、このなみなみならぬ努力の結晶であるビブリオグラフィーを、今まで全く利用して来なかったし、他の国際誌に頼る事になっている。

第2に、費用の問題である。編集者のご苦勞は、かねがねお察ししていたが、その発行のために毎年95万円が使われ、学会予算の半分を占めていたとは、うかつにも全く知らなかった。このモニュメントのために、それだけの費用と労力が費やされて来た事に、今更ながら驚きの外なく、ご苦勞様でした、お休み下さいと言いたい。100万円近い費用があったら、もっと建設的な事業に振り当てられるのではなからうか。従来提案のなされて来たマイコプラズマ検索、血清の検定、大学におけるCell Biology の教育の充実等々。更に付け加えるならば、現在癌特別研究班で行っているような血清その他の研究資料の無料または格安な価格での供給 system を培養学会に導入できないものだろうか。このように死んだモニュメントとしてのビブリオグラフィーが、新たな前向きの事業に生れ変わるとすれば、単なる廃刊ではなく、素晴らしい復活ではないだろうか。

以上のとおりであるが、伝統ある日本組織培養学会の伝統あるビブリオグラフィーに対し、またそれを大切に守って来られた諸先輩、諸先生方には、大変失礼な発言であったと思うが、今後の日本組織培養学会の発展を願う気持ちに免じて、お許しいただきたい。

§ 第31回アメリカ組織培養学会印象記

大分医大・内科 高木 良三郎

久しぶりにアメリカに渡り、6月1日から5日までセントルイスで行なわれた第31回アメリカ組織培養学会に出席しました。前回の出席は1964年ボルチモアの第15回総会でしたから、16年ぶりということになります。

セントルイスではDr. M. Goldsteinのお宅に学会期間中泊めて頂きました。彼は私の留学中のホスで、現在ワシントン大学医学部で解剖学の教授をしておられ、今回の学会の組織委員でした。学会はミシシッピ河沿いにあるStouffers Riverfront Towersの地下2階ホールで行なわれました。6月1日の登録につづき2日から各セッションが始まりましたが、plant culture を含め多くの会場

に分れているため全部を廻ることは不可能で、同行した宮崎君とワシントン大学医学部病理に留学中の小野さんとで手分けして会場に入った次第です。参加人員は700人位ということでした。

発表は口演とポスターセッションにわかれておりましたが、総演題数246、うち口演152題、ポスター94題で、以前からのことながらポスターセッションが有効に使われており、たっぷり時間をかけて十分な討議がなされておりました。一般口演は一題15分で、討議時間の3分がそのなかに含まれており、大体4~5人の質問で終るようでした。技術的な面では日本のレベルはもはや決してアメリカのそれにひけをとることはなく、むしろ勝ったものもあるようです。また内容に関しても若い人の発表の中には、思いは高くともテクニックがそれに伴っていないようなものもあり、きわ立ってexcitingな発表はなかった様に思いました。学会のプログラムインデックスを参考のため末尾に示しておきます。

Liver culture のセッションは9題ありましたが、私共の発表したひと肝実質細胞の分離培養以外はすべてラット肝細胞または肝癌細胞を用いた研究でした。Collagenase と Dispase を用いた肝細胞の分散法につき、休憩時に数人の方から具体的な質問をうけ、Dispase の宣伝をしてきたような次第です。Session in Depth の "The role and replacement of serum in culture media" はやはり人の集まりも一番多かった様でした。Dr. Sato, Dr. Ham を中心として活発な討論がありましたが、詳しくはこのセッションの代表的御二人の最近の論文を参考にして頂きたいと思えます。

Ham, R. G., Survival and growth requirements of nontransformed cells.

to be published in the Hand book of Experimental Pharmacology.

Barnes, D. and Sato, G., Methods for growth of cultured cells in serum-free medium. Anal. Biochem., 102, 225-270, 1980.

展示会場にGIBCOか来ておりましたので、牛胎児血清の状況を探ってみました。"アメリカでは状況は好転しつつあるが価格は変らないだろう"との返事で、まず日本での入手は望み薄な感じでした。会場の展示物も日本の学会のそれと殆んど変わらず、特に目新しいものはありません。しかし羨しかったのはその価格が安かったことです。ペーカーの水平流のクリーンベンチ(間口1m位)が定価で\$2,000、セーフティキャビネットは確か\$5,000ということでした。その他培養器具、試薬など現在のドルに換算するとまことに安価で、新設医大研究室の設営に四苦八苦している私にとってはまさに垂涎の的でした。

会場の四日間を通じ、Dr. Sanford, Dr. Leighton, Dr. Waymouth, Dr. Sato, Dr. Ham, Dr. Cailleau など日本に来られたことのある方々と久しぶりにお話しする機会をえたことはまことに幸でした。10年の歳月を経て、組織培養の分野でも故大平首相の"現在のアメリカは one of the powers" であるといわれた言葉があてはまりそうな気がしました。今回の学会がそのスケールに比し今一つ覇気に欠けているようにも思えたのは私だけだったでしょうか。日本の組織培養学会は、いまや自からの手で自らの生き方を模索する時期が来ているように思われます。

PROGRAM INDEX

Symposium	189
Sessions-in-Depth	
Amniotic Fluid Cell Culture—Applications in Prenatal Diagnosis	197
Asexual Embryogenesis in Crop Plants	193
Clonal Plant Generation of Food Crops	199
Lipid Metabolism and Studies on Atherogenesis in Cell Cultures	198
Nutrition and Metabolism of Invertebrate Cells	193
Somatic Cell Selection and Crop Productivity	197
The Role and Replacement of Serum in Culture Media	199
Virus-Cell Interactions	194
Contributed Papers	
Carcinogenesis and Mutagenesis	195
Cell Products and Substrates	192
Characterization and Differentiation	200
Establishment of Cell Cultures	191
Hormone Action	197
Liver Cultures	194
Plant Tissue Culture	191
Senescence In Vitro	196
Tumor Cell Culture	198
Round Tables	
Aging and Carcinogenesis	199
Amniotic Fluid Cell Culture	199
Committee for Standardization, Collection, and Distribution of Cells and Tissues In Vitro Standards for Cell and Tumor Laboratories	193
Honor B. Fell Division Organ Culture as Model Systems for the Study of Hormone Effects on Target Tissues	193
Hybridomas	202
Invertebrate Division Initiation and Characterization of Invertebrate Cell Lines	193
Laboratory Materials and Biosafety Committee Do It Safely! Use and Disposal of Hazardous Biological and Chemical Agents	202
Mechanisms of Secretion by Cells in Culture	202
Media Standardization Committee Matrices and New Substrates	199
Plant Division Genetic Engineering	193
Plant Propagation	199
Secondary Metabolites	193
Sera and Contamination Committee Fetal Bovine Serum: Problems in Procurement	199
Tissue Culture Approaches to Invasiveness of Carcinoma	193
Viral and Chemical Carcinogenesis: Is There a Common Ground?	202
Poster Sessions	
Cytogenetics	201
Hormones and Differentiation	201
Methodology	194
Plant Cultures	195
Toxicology and Biochemistry	201
Toxicity and Carcinogenesis	190
Tumor Cell Growth and Differentiation	190
Tumor Immunology and Virology	190
Virology and Immunology	200
Film Session	200
Read by Title	202

§ 会員通信発送上の手違いについてのお詫び

(財)日本学会事務センター

日本学会事務センターの新入会員に対するコンピューター処理上の手違いにより、会員通信第36号～39号について、昭和53年秋および昭和54年春に入会された会員のみなさまへの会員通信の送付がもれておりました。ここに深くお詫び申し上げます。

なお上記の誤りは、該当期間約1年間の処理方法の欠点について生じたものでしたが、現在は新入会者の入力により自動的に送付するシステムに変更いたしておりますので、今後このようなことは生じないと存じます。

長期間にわたって問題の所在に気付かず、みなさまにご迷惑をかけておりましたこと、重ねて深くお詫び申し上げます。

§ 編集後記

暑中お見舞い申し上げます。

会員の皆様にはいかがおすごしですか。大いに身体をきたえ、秋の学会シーズンを乗りきろうではありませんか。(H. K.)